

健康太極拳の誕生

－楊名時とその太極拳普及初期に関する歴史研究－

蒲生諒太*

The Birth of Health Tai Chi Juan:

A Historical Study of the spread of Yang Ming Shi's Tai Chi Juan in the 1960s and 1980s.

GAMO Ryota

Abstract

The aim of this study is to clarify Yang Ming Shi's actions in the early era of Tai Chi Juan's spread in Japan (1960s-1970s). Yang Ming Shi was the founder of Health Tai Chi Juan, which are the unique style to Japan and arranged by him for Japanese practitioners. Although Yang was one of the innovators of Japanese Tai Chi Juan, previous studies of this subject do not consider his actions of founding and spreading Health Tai Chi Juan. This study will try to clarify the unknown points during this period.

This study first checks the birth point of his Tai Chi Juan style where was the training in Asia-Africa Linguistic Institute in 1960. This study finds out the error of his describe the date of this training, rewrites the date and the situation of the first Tai Chi Juan training.

Next, this study describes the "Japan Tai Chi Juan Association," where Yang formally taught Tai Chi Juan. This organization was founded during period of disconnect between Japan and China. After the restoration of diplomatic ties between these nations, the organization denied his original style of Tai Chi Juan. Therefore, he had to found his original organization by some patrons.

This study next indicates the relationship between his organization and the "Society of Health and Longevity." Yoshida Seizo, who was a doctor and a patron of Yang, was the founder of the "Society of Health and Longevity." Although Yang and Yoshida formed a partnership aimed at spreading Tai Chi Juan, Yoshida ended his support toward Yang after a disagreement. This paring made the original media of his organization.

Finally, this study organizes the whole situation of the birth of Yang Ming Shi's Tai Chi Juan and its spread during this period. Chinese language teacher Yang taught Tai Chi Juan as the introduction of Chinese culture. The "Japan Tai Chi Juan Association" made him the authority of Tai Chi Juan in Japan. Denying his style by this organization and breaking his relationship with Yoshida gave Yang a chance at independence as Tai Chi Juan's organization founder.

キーワード：太極拳、歴史研究、楊名時、健康太極拳

*京都大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Kyoto University)

7r.lss001@gmail.com

I 序論

1. 養生法としての太極拳

本稿は日本独自の健康太極拳を確立した楊名時(1924-2005)の太極拳¹⁾普及初期に焦点を当てた歴史研究である。まずは本稿で行う検討の背景にあたる、養生としての太極拳や楊が日本の養生へ果たした貢献などについて説明を加えたい。

太極拳は中国武術の1つである。中国の陳家溝発祥のこの武術は当地の陳家に伝来していたもの(陳式太極拳)を楊式太極拳の祖、楊露禪が北京へ伝承した際、都市部の文人向けにアレンジし、現在のゆったりとした動きとなったとされる。陳式太極拳が発端となった太極拳は楊式太極拳へと展開した。その後、それぞれの背景となる武術や文化の違いから、様々に分派、継承されていった(笠尾、1994、2000、松田、2001などを参照)。

この武術の養生的な側面に着眼したのは中華人民共和国の毛沢東であった。若き毛は1917年発表の論文で人民の身体を鍛える必要性を説き、「体育は養生の道」として自身でも運動法を開発・提唱した(毛、1964)。体育＝養生に注目していた毛は陳式太極拳や楊式太極拳など、様々に分派し発展していた伝統太極拳(伝統拳)をもとに人民が簡単にできる簡化拳(簡化太極拳)を編纂するよう指示を出した(中華人民共和国体育運動委員会、1977などを参照)。こうして1956年、「太極拳運動」である簡化24式太極拳が楊式太極拳の李天驥らによって編纂され中国政府が制定した(李、1992など参照)。

この当時、日本と中国の間は第2次世界大戦の影響から国交が断絶されており、大陸で起きた太極拳運動の萌芽は日本にはほとんど届いていなかった。1972年の日中国交正常化以後、中国政府が主導し、日本の各競技団体が視察団を送るなどして、中国の太極拳運動、そして、スポーツ化された武術太極拳は日本でも広がって

いく(李、2009を参照)。

太極拳はスポーツ競技としてその名を広めていくが、一方で養生法としても普及・研究されている。たとえば、かつての日本の太極拳普及の中心であった全日本太極拳協会の三浦英夫(1979a/1979b)は『美と心と健康の太極拳』・『太極拳健康法』を著し、健康のための太極拳を標榜していた。現在では楊(2007)や楊・楊(2007)など、健康・美容志向の太極拳が普及されている。太極拳の健康面での効果は学術的にも検討されてきている。メタアナリシスとしては、身体機能や精神的健康への効果(大平ら、2010)、中高齢者の健康への影響としては心身の機能低下予防(笹原・松原、2016)が太極拳に存在するという検討が行われている。また、認知機能の改善の可能性が示唆される一方で(孫、2011)、がん患者へは効果が明らかになっていない(奈良ら、2013)。このように太極拳の心身の健康への効果測定は研究され一定の効果が認められているものの、まだ、未解明な部分が多いといえる。

以上のように現在では健康・美容の技術としての太極拳の普及やその心身への効果が研究されており、太極拳の養生法としての側面が脚光を浴びているのである。

2. 健康太極拳²⁾と楊名時について

先に示したように簡化太極拳が誕生してから日中国交正常化までの間、つまり、1956年から1972年の間、日本では太極拳なるものが全く広がることなく、中国発の養生法に日本人たちが触れられなかったかということ、実はそうではない。むしろ、この間こそが、日本での太極拳普及の草創期といえ、武術太極拳以前の太極拳指導者たちによる交流・普及活動があったのである。それは香港経由で渡ってきた華僑(王編訳、1976や黄、1986)、中国からの復員兵士(永富、1986、1995)、彼らから学び独自に研鑽を積んだ日本人指導者(大滝、1972)らによるものだった。

その中でも武術太極拳に対して、健康太極拳の旗印を掲げ、伝統拳・制定拳ともつかない、第三の太極拳である日本独自の太極拳を展開していったのが楊名時である。楊は中國大陸に生まれ、学齡期、武術を学んだ。その後、留学生として来日、京都帝国大学で学び、東京中華学校の校長を経て、大東文化大学の教員となった人物である。彼は中國大陸で学んだ伝統拳をベースに、制定拳を日本人向けにアレンジし、楊名時太極拳を作成、さらに気功法の八段錦やスワイショウ、瞑想法である立禅をパッケージにした健康太極拳の創始者となった(楊監修/楊・橋、2000、楊・橋、2011などを参照)。

八段錦やスワイショウの取り入れなど、楊の太極拳には気功的な部分があり、彼は日本における気功普及の第一人者という一面も持っていた。中国政府によって編纂された健身気功の日本語翻訳テキストには楊が翻訳監修として名を連ねている(中国・国家体育総局健身気功管理センター[編]、楊・帶津[日本語監修]、2004)。また、従来、秘伝とされていた様々な気功法をカタログ化(津村、1990や2011など)するなど、日本での気功普及をリードしている津村喬とも強い結びつきがある。日本での津村の最初の師は楊であり(津村、2014)、彼の気功研究の集大成といえる『実践 伝統四大功法のすべて』の「八段錦」の巻では中国気功の大家である焦国瑞の八段錦と並び、楊の八段錦が収録され「日本で一番親しまれ、実際にたくさんの人にやられてきた気功」として評価されている(津村[編]・帶津[監修]、2004、38)。

さらに健身気功日本語テキストの監修者で、ホリスティック医学など(帶津[監修]、1993)、日本での養生研究・実践の第一人者の帶津良一は、楊と親しい関係にあり、『ドクター帶津がすすめる 50歳からの楊名時健康太極拳』と銘打った書籍をともに記している(楊・渋谷、2004)。また、自身も健康太極拳を実践し、前出の『実践 伝

統四大功法のすべて』の「八段錦」の巻では、帶津・津村・楊で鼎談し、さらに帶津が楊の八段錦を実演している(津村[編]・帶津[監修]、2004)。2000年には帶津は楊名時太極拳21世紀養生塾を立ち上げ、2012年にNPO法人 楊名時太極拳・養生塾として塾頭を務めている³⁾。帶津(2016)はアグネス・チャンをモデルに太極拳を養生法として紹介しているが、ここで紹介されているのは健康太極拳(楊名時太極拳及び楊の八段錦)である。

このように日本の養生に功績を残した楊であるが、彼のキャリアは太極拳や気功一色というわけではなく、紆余曲折を経たものとなっている。健康太極拳の『規範教程』を編纂した楊進・橋逸郎(2011)は学齡期に楊が「伝統楊式太極拳108式」を修めつつ、その師である王新午より「伝統呉式太極拳」の風格を受け継いだと記しているが(p.19)、他方で楊は長年の空手愛好者でもあり、後述するように自身の太極拳が空手の影響を受けていることを述べている(楊、2004、152)。また、そのキャリアの多くは武術家としてのものよりも、教師(とくに中国語教師)という文人の職業が占めている。

このように多様な経歴を持つ楊が太極拳の指導者として、独自の太極拳を普及し、組織化したのは中年期以降のことであった。彼自身の転換点となったのは、1960年から1980年代にかけて健康太極拳を確立し、その指導パッケージや組織を形成していった時期と考えられる。この時期に、中国語教師楊は太極拳指導者としてその身を立てたのである。興味深いことにこの時期は先に示した日本における太極拳普及草創期と重なっている。

一方でこの時期についての歴史研究はほとんど進んでいない。当時の人々の断片的な語りが残されているにすぎず、実際に何が起きたのか分からずにいる。日本の太極拳普及についての数少ない研究の1つである李(2009)でも、この

草創期の出来事について詳しい記載はほとんど見られず、楊や彼の団体についての記述も一般的な内容を除いて詳述はされていない。1960年代から継続する団体はほとんど存在せず、太極拳普及草創期の出来事そのものが不明瞭となっている上に、楊自身も自伝などで当時の出来事をぼかして語ったり、事実関係がはっきりと記されていないかったりと(楊、2001 など)、歴史的記述としてそのまま受け取ることはできない。日本健康太極拳協会でもとくに 1960-1970 年の頃に関しては資料不足であるということが表明されており(日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会、2000、48)、協会としてもその頃の出来事を把握しきれていない様子である。

このように日本の養生実践に功績を残した楊と彼の太極拳がどのように誕生し、初期の展開を果たしたのか、不明な状況である。このことは日本の昭和養生史を考える上で大きな史的欠落として理解される。

3. 本稿の目的と構成、方法について

このような問題意識の中で、本稿では日本独自の養生法として展開した健康太極拳とその創始者である太極拳指導者・楊名時の誕生、その展開について明らかにすることを目的とする。それは中国語教師・楊名時がどのような経緯で太極拳指導者・楊名時へと変貌し、自身の組織を確立したのかという経緯を検討するものである。また、日本における太極拳普及期である、1960年代から1980年代にかけての楊の活動と周囲の状況を当時の資料や聴き取り調査をもとに再構成する取り組みとなる。

以下、3章に渡って太極拳指導者としての楊と彼の太極拳がどのように誕生し展開していったのか明らかにする。

Ⅱ章では中国語教師楊が初めて太極拳を教えた場面を検討していく。すでに楊自身、1960年にアジア・アフリカ語学院という語学学校で学

生を対象に教えたのが初めてである旨、書き記している。この点についてアジア・アフリカ語学院に残された資料、当時からの弟子の証言をもとに検証し、楊が1960年代前半にどのようなかたちで太極拳を指導していたのか、明らかにする。

Ⅲ章では中国語教師であった楊が太極拳指導者として世に出た日本武道館での稽古について検討していく。そこではあまり楊自身が言及しない日本太極拳協会という団体での彼の活動と最終的に彼が窮地に立たされたことを当時の資料と証言から明らかにする。

Ⅳ章では日本太極拳協会を去った後の楊と彼の後援者となった吉田誠三、吉田が率いた健康と長寿の会との関係について検討する。楊と吉田の関係の変化と最終的な決裂の経緯を明確にしていく。

最後に、これら日本太極拳協会からの脱退や健康と長寿の会との別離が現在の日本健康太極拳協会の前身楊名時八段錦・太極拳友好会を独立団体として確立していく契機となったこと、つまり、健康太極拳の誕生に大きく影響を与えたことを示す。

本稿での研究方法について記したい。本稿では資料及び聴き取り調査で得られた証言をもとに検証を行う。資料及び証言は楊の記述を検証する目的で収集され、1つの出来事について複数の資料及び証言を突き合わせ、整合性を検討、さらに当時の時代背景を考慮して信憑性を確認した。また、楊と袂を分かった人物や関係者の資料や聴き取りも行い、双方の視点から事実を明らかにすることに努めた。ただ、既に鬼籍に入られていたり、組織が解散し関係者の足取りがつかめなかったりする場合などは限定的な資料、証言から検証を行った。

検証のために用いた主要な資料・証言は以下の通りである。Ⅱ章ではアジア・アフリカ語学院が残していた資料及び当時の太極拳指導者と

しての楊を知る関係者の聴き取り証言、Ⅲ章では日本太極拳協会の関係者からの聴き取り証言が難しく（関係者の多くが亡くなり、組織が雲散霧消しているため）、当時の出来事をまとめた関係者の資料及び楊側の関係者の聴き取り証言、Ⅳ章は吉田及び健康と長寿の会の関係者の聴き取り証言、資料、それに対して楊側の関係者の聴き取り証言を用いた。

聴き取り調査に関しては協力者の同意のもと、音声を記録し、トランスクリプトを作成、資料データとして用いた。その後、協力者との電話でのやり取りの中で新しい事実が判明した場合を電話での聴き取り調査として、その旨、記した。

Ⅱ 「1960 年」の検討と健康太極拳の「種」

1. 中国語教師・楊名時と武術

本章では中国語教師であった楊が最初に太極拳を教え始めたとされる 1960 年に照準を合わせ、当時の楊の状況を検討する。

ひとまず、本節では楊が中国語教師として生計を立てるに至った経緯を彼の証言(楊、2001)をもとに整理したい。

「官費留学生」として来日し、留学生向けの教育機関である東亜学校で学んだ後⁴⁾、楊は京都帝国大学法学部へ進んだ。京都に滞在中、結婚、家庭を持った。終戦後、彼は帰国を断念して日本での生活のために東京へと向かう(楊、2001、11-98)。楊は、帰国断念は国共内戦に抛る混乱を避けたものであると示唆している(同、102-103)。

彼が生まれ育った頃の中国は日中戦争(1937-1945)の只中であつた。当時、日本軍が占領した土地は軍によって設立された傀儡政権の支配下になることがあつた。彼の故郷、山西省は 1937 年 12 月に北京にできた中華民国臨時政府のもと、他の華北の地域とともにこの傀儡政権によって統治されることになった。この政権は後に、南京で日本軍の指導のもと、汪兆銘に

よって樹立された中華民国国民政府に吸収合併され、同政府の華北政務委員会の指導下におかれることになった(菊池、2014)。

1943 年に「山西省の官費留学生」に合格した楊は(日本健康太極拳協会、2010、255)、この中華民国国民政府の留学生として日本にやってきたと考えられる。同政府は日本の敗戦まで占領統治を行っていたため、戦後、同政府の留学生たちが日本軍への協力者として訴追される可能性が高まり、実際、多くの留学生が帰国を躊躇していたという(田中、2003)。楊は終戦後の大陸での混乱を避けたと示唆しているが、当時の官費留学生が置かれた状況が少なからずとも彼の行動に影響していると考えられるだろう。

楊は大阪で新聞社の職員として勤務した後、東京に出て東京中華学校の教員に、そして、校長に就任する⁵⁾。楊の証言では中国大陆における国民党と共産党の内戦が校内にまで及ぶ中、自身が明確な態度を示さずにいたため、退任に至ったということである(楊、2001、108-109)。

1957 年より失職した楊は 1966 年 4 月に大東文化大学専任講師へ就任するまでの 9 年間、中国語の非常勤講師として生計を立てることになる。9 年間の中国語教師時代、楊は中国にいる友人から贈り物として 1 枚のポスターを手に入れる。それは簡化 24 式太極拳の套路図であつた。楊は友人とそのポスターをもとに制定拳を練習する(同、141-142)。このとき、彼は幼いころに学んだ伝統拳の素養をもとに制定拳を自分自身で解釈したようである。それまで太極拳については気分転換に行っていたと記している⁶⁾。

一方でこの頃の楊は日本の武術との関係を深めていた。彼は東京中華学校時代に空手と出会い、のめり込んでいく(同、127)。楊は武術に関心が強く日本では柔道を稽古していた。東京中華学校に教えに来ていた教師が空手をしており、楊が柔道をしていると知って、空手をしないかと誘ったのである(同、124-125)。楊によると 5

段を 45 歳で取ったという(同、127)。この記録に従えば、1969 年まで楊は空手に没頭していたことになる。空手は楊の太極拳にも強く影響を与えたようである。彼は 1988 年、自らの組織の機関誌に次のように書いている。

私は幼少の頃から中国武術をいろいろやってきた。日本に来てから柔道、合気道、空手などをやり、いちばん長く続いたのが空手である。空手を通じていちばん貴重なものを頂戴できたような気がする。私は私なりに中国のゆったりとした、柔らかい動きがわかるが、また、空手の決めも大好きである。私の太極拳は、中国の太極拳が基盤だが、日本の空手が体に生きていて、中国と日本のよさを合わせていると思っている(楊、2004、151-152)。

中国語教師として生活をしながら、空手に没頭する中国人。気分転換に太極拳をたしなみつつ、同郷の友人より手に入れた簡化太極拳の套路図をもとにアレンジした自身の太極拳を形成していく。それが 1950 年代後半から 1960 年代にかけての楊の姿であったと考えられる。

2. アジア・アフリカ語学院にて

楊は調布に新設された語学学校アジア・アフリカ語学院に中国語の非常勤講師として勤務することになった。彼はこの学校で初めて太極拳を教えたという。これが「1960 年」であるという。日本健康太極拳協会は 2010 年を楊名時太極拳 50 年としており、50 年史の年表では 1960 年の項目に「東京・三鷹のアジア・アフリカ語学院で授業の合間に楊名時先生が太極拳の指導・普及を開始」(日本健康太極拳協会、2010、255)とあり、健康太極拳の端緒を「1960 年」に定めている。

しかし、この「1960 年」という年代について

は、資料との突き合わせから疑問が浮かぶ。というのも当該のアジア・アフリカ語学院の開校は 1962 年であり、1960 年には存在していなかったのである。この点をアジア・アフリカ語学院側の資料から検証してみよう。

そもそもこのアジア・アフリカ語学院とはどのような組織か。この学校は郭博という人物が残した郭沫若文庫をもとに、菊地三郎らによって建設されたアジア文化図書館(1958 年開館)が前身となった語学学校である。この学校が開校したのが 1962 年であり、それまでに前身の図書館で中国語講座を行っており、楊がそこで語学の授業を持っていたなどの事実は関連資料からは読み取れない(50 周年記念誌参照)。そのため、1960 年にアジア・アフリカ語学院やその前身の機関で楊が教壇に立っていた可能性はほとんどないと思われる。

1962 年の開校初年度の教員記録には楊の名前はない。記録では中国語講座の学生は本科 7 名で教師は 5 名、そのうち、中国人と思しき教師は 1 名だけである(50 周年記念誌、78)。楊の名は開校 2 年目、1963 年の記録にある。7 名の中国語教師に中国人と思しき人物が 3 名で、楊はその 1 名である(同、83)。ネイティブ教員の補充として当時、東京の大学や専門学校で教えていた楊が非常勤として採用された可能性が考えられる。

アジア・アフリカ語学院の学生数(本科)に注意したい。学校は 2 年制の専門学校である。1962 年創立当初の入学者は 32 名(50 周年記念誌、78)、1963 年 28 名(同、83)、1964 年 35 名(同、90)であった。楊が着任した 1963 年頃のアジア・アフリカ語学院では 2 つの学年合わせて学生数が 60 名程度だったようである。1963 年、新入生の中で中国語講座は 5 名であった(同、83)。学生数 60 名のうち、中国語を学ぶ学生は、2 年生 7 名と 1 学年 5 名で 12 名程度ではないかと考えられる。

楊はアジア・アフリカ語学院に 1963 年から勤務していたことが資料の精査から判明した。そして、楊がこの学校にやってきた頃、中国語を学ぶ学生は非常に少なかったことも明らかになった。その上で次の楊の文章を読みたい。

昭和 35(1960)年、私は講師をしていた学校のひとつ、三鷹にあるアジア・アフリカ語学院という学校で授業の合間に簡化太極拳の一連の動作を自らやり始めました。最初は「なんだろう、あれは？」という目で遠巻きに眺めていた学生たちも、回を重ねるごとにだんだんと私のほうに近づいてきて、私の動作をまねるようになったのです。/「これは中国の太極拳というものです」/と、私は集まった学生たちにいいました。そのうち、熱心な数名と授業が終わってから太極拳をやり、その後で深大寺へおそばを食べに行くという習慣までできました。アジア・アフリカ語学院は夏の合宿を恒例としていましたが、その合宿先でも学生たちと一緒に簡化太極拳をやりました。こうして、現在も続いている「楊名時太極拳」の最初の一粒の種が蒔かれたのです(楊、2001、144)。

年代については先に示したとおりである。アジア・アフリカ語学院の学生数は 60 名程度と少なく、中国語を学ぶ学生は 10 名程度である。楊の太極拳を「授業の合間に」眺めていた学生たち、そのうち、興味を持った学生となるとかなり少ないと予想できる。少人数授業であることから緊密な人間関係が生まれ、その延長で学生たちが講師の行う太極拳に同調したと考えることができる。ただ、楊の初期からの弟子に尋ねても、この学生たちのうち、後になるまで楊に師事し続けた人はいない。そうすると、このアジア・アフリカ語学院の太極拳において、太極

拳の師弟関係が存在したとは考えにくい。太極拳として明確な稽古がそこにあったというよりも語学教師と学生の関係性が第一にあり、その延長にある文化学習として太極拳を捉え、授業終わりの習慣として実践していたと考えられないだろうか。

アジア・アフリカ語学院で楊が活躍している写真が残っている⁷⁾。これは学院の「合宿」風景である。写真の中には学生の型を指導している空手着姿の楊の姿があり、学生は腕が伸びきっており、突きの練習をしているように見える。前述のように当時、楊が空手に没頭していたことを考えると、この写真は空手の指導とみたほうが良いだろう。もちろん、楊が記したように太極拳を行ったのは事実だろう。しかし、それは語学合宿の合間の気晴らしに、空手や太極拳を文化学習の一環として学んでいたのではないかと推測できる。

それではアジア・アフリカ語学院で蒔かれた「種」とは何か。それは、楊が太極拳を行う際、少数の学生が同調したものであり、授業の合間に講師と談話するものの延長にあった程度ではないかと推察される。少なくとも組織だった稽古や大人数による演舞が行われたわけではなく、もともと少ない人数の学校のさらに少ない人数で行なわれていた授業(のようなもの)の一部という認識のほうが妥当だろう。

3. 中国語の教室で

この頃の中国語教師・楊名時の姿はどのようなものだったのか。アジア・アフリカ語学院の資料には残されていない。そこで後に彼の太極拳普及をサポートすることになる渋谷(後の楊)麻紗⁸⁾の証言に注意を向けたい。

彼女によると楊は他の中国語の教室でも太極拳らしき動きを授業の合間で披露することがあったという。1963 年頃、善隣書院という語学学校に通っていた学生の渋谷(楊)は楊が授業中に

不思議な動きをするのを目撃している。

時々、なんかふわっと、「ちょっと肩凝ったから、なんかやるから」なんていうことでね、「なんかやる」っていってもそれは別に太極拳のあれ(注：套路)じゃなくて、その中の一部だったかもしれない。型の一つぐらいはやったかもしれない。で、みんなを笑わせたんだよね。⁹⁾

この証言に出てくる「なんか」が太極拳かは分らない。「肩凝り」を治療する養生法であることは確かであり、太極拳あるいは気功の功法である可能性がある。少なくとも当時没頭していた空手の動きは「ふわっと」と表現されるものではないため、これが空手である可能性は考えにくい。

重要なことは語学の授業においてこのような動きを行うことが楊にとって日常的であったということである。この動きが太極拳や気功に通じるものであるなら、アジア・アフリカ語学院とほぼ同時期の善隣書院でも太極拳あるいは気功のようなものを披露していたことが判明する。中国語教師である楊は教室の中で太極拳ないしは気功のような養生法を披露し、少数の学生がそれに興味を持っていた。しかし、それは教えるというものではなく、あくまでも楊にとっては自身が養生を行うこと、あるいは中国文化の紹介であったと考えられるのである。

こうして 1960 年代初頭の楊とその太極拳の様子が明らかになってきた。1963 年頃、アジア・アフリカ語学院で授業の合間などで太極拳をしていた楊に、学生から少人数のフォロワーが出てきた。同時にこの頃、楊は他の中国語の授業内でも太極拳ないしは気功のような養生法を披露することがあった。これらのことを考えると、この頃の実践はあくまでも中国語講師と学生の関係性を基盤とした文化学習あるいは授業の延長

に行われていたものと考えられるのである。

Ⅲ 日本武道館での出来事

1. 楊名時と日本の指導者との交流

本章では日本武道館での日本太極拳協会の活動との中で太極拳指導者・楊名時が誕生した経緯と顛末を検討する。

前章では 1963 年頃に楊が太極拳を学生とともに行っていたということが証言と当時の資料から示された。実はこの当時、楊が日本の太極拳団体の学習会に参加していたという記述が残っている。楊の著作や日本健康太極拳協会の資料にはないこの話について、関係する人々・組織が断片的に残した資料をもとに検討したい。

黄耐之という華僑が東京都内で太極拳を指導していた。黄は日本の太極拳普及の草創期を支えた指導者の 1 人である。彼は、厚生大臣を歴任し、日本での太極拳普及に貢献することになる政治家、古井喜実に請われて東京で太極拳の学習会に参加し講師をしていた。学習会は黄だけではなく、中国から復員した日本人も指導者として参加していた。この学習会を母胎に 1966 年に＜日本太極拳協会＞という(本章で検討する日本太極拳協会の前身となる)団体が立ち上がった。黄とともに講師を努めた永富博道の回想ではこの 1966 年の＜日本太極拳協会＞に楊も参加していたという(永富、1986、6)。また、永富の弟子の前野は 1964 年の砂防会館での学習会にも楊が参加していたと書いている(ただし、当時の前野は太極拳学習をしていないため、永富から聴き取った内容をもとに記していると思われる。前野、1995、29)。

1966 年の＜日本太極拳協会＞で楊が初めて太極拳を学んだとすれば、1963 年頃にアジア・アフリカ語学院で太極拳を行っていたことはまったくの虚偽となるため、それは考えにくいだろう。そこで一から太極拳を学んだということはなくとも、同好の士として、自分の套路の点検

(とくに簡化太極拳について)などを目的に参加したという可能性が考えられる。実際にのちにこの団体に統合を持ちかける日本武道館の三浦(1980)は、この団体を「相互学習」の会だと認識していた。

後述する日本太極拳協会では楊とともに師範として指導に当たった大瀧一雄は当時、＜日本太極拳協会＞に参加していた。後年、自分が楊に太極拳を教えたとは彼は弟子に告げている(松田、1987、14)。これが＜日本太極拳協会＞での出来事なのか、日本太極拳協会での師範同士の相互交流であったのかは分からない。

楊は手に入れた套路図をもとに簡化太極拳を自己流で習得したと述べていたが、武術好きの楊が日本国内で立ち上がった太極拳の学習会に参加していた可能性は全くないとは言い切れないだろう。この点については楊自身が語っていないし、各資料にも楊の参加について詳述されているわけではないので、その実際は不明瞭である。ただ、楊が太極拳を授業中・授業後に披露しだしたこの頃、太極拳への注目は日中友好ムードの中で確かに存在したということである。

2. お汁粉と職員向けの活動

さて、非常勤の中国語教師として働いていた楊は1966年、大東文化大学文学部に専任講師として招かれることになる(楊、1995、5の「略歴」参照)。こうして9年間に及んだ楊の非常勤生活は終わりを告げ、安定したポストを獲得するに至った。

ここで彼は太極拳指導者・楊名時へと転換する機会に巡り合うことになる。この出来事は楊の著作や日本健康太極拳協会の資料にも詳しい。今回、当時の資料を入手したので、それもとに検証し、詳しい顛末を記したい。

大東文化大学に職を得た楊は武術としては空手にのめり込んでいたようである。この頃には名だたる空手家と交友関係が生まれていた。

1968年の1月7日、楊は後樂園卓球センターでの日本空手協会鏡開き稽古に参加し、太極拳の套路を披露する。このことが翌日8日(月曜日)付けの日刊スポーツにコラム記事として掲載された。記事は11面のコラム「目・耳」である。このコラムではスポーツ関連の出来事が複数、アラカルト的に紹介されている。楊の記事もあくまでも1つの他愛ない出来事として取り上げられている。記事のタイトルは「これはビックリ? 一空手協会けいこ始めにインスタント汁粉」である。

日本空手協会(後樂園卓球センター)のけいこ始め。紅数点をまじえて「エイ、ヤッ」ドタン、ボタンと勇ましかったがそのあとの汁粉会に同協会創設以来の“インスタント汁粉”が出てキモをつぶした人もいた。/ 昨年までは地下のグリルが作ってくれたが、いまはグリルが休業中とあって、やむない窮余の一環。中国武術「太極拳」を披露した大東文化大の楊先生も「ヨウいわんわ」といった表情で好物の汁粉をすすり、手伝いの女性たちも「簡単でいいけど、やはり手持ちぶさた」と苦笑していた¹⁰⁾。

上に全文を引用した記事自体は、鏡開き稽古で振る舞われた汁粉がインスタントだったという何の変哲もない囲み記事である。スポーツ記事としてニュースバリューのあるものとして書かれているわけではない。この記事に挿入されたカッターシャツ姿の楊の套路と思しき写真がある。これが、楊が太極拳指導者として世に出るきっかけとなった。この記事を見た日本武道館の事務方であった三浦英夫が楊に稽古の指導を頼んだ。中国武術に興味を示していた三浦は1965年に日本武道館内に太極拳の研究会として「太極拳研究会」を立ち上げていた。

三浦はひとまず、楊を日本武道館の職員向け

の学習会に招聘することにしたようである。この招聘について、楊はそれほど前向きではなかったと後年語っている。新聞記事を読んだ三浦が電話で楊に会いたいと告げた。このやり取りを後年、楊は次のように自著に記している。

開口一番、/「楊先生、八段錦・太極拳を武道館で教えてくださいませんか。うちの職員を全部集めますから、はじめてもらえませんか」/と、大変な肩の入れように、わたしはもうびっくりしてしまい、/「武道を教えたことも経験もないし、自分も教えるようなものは持っておりません。わたしには向いていないと思うのですが……」/と、二の足を踏むと、三浦氏はたたみこむように……熱心にすすめられ、/「それでは、教えることは学ぶことですから、みなさんといっ緒^マに学ぶつもりでお引き受けしましょう」(楊、1980、221-222)

この証言自体は脚色がされている。「八段錦・太極拳」とあるが、新聞記事で八段錦のことは書かれていないから、この表記は読者向けに書き加えられたものと理解できる。この中で楊が「武道を教えたことも経験もない」と語っていることには注意を向けたい。この語りが後年の記事であったとしても、これまでのアジア・アフリカ語学院での太極拳の披露と日本武道館の太極拳では全く質が異なっているということが読み取れる。武道として教えることに重点を置かざるをえなかった日本武道館での太極拳の特徴が現れている。そして、そのことに対して楊は自信がなかったということも表れている。

三浦の招聘に応じて楊は太極拳を職員に教えるために日本武道館に通い始めた。楊自身、空手を長年行っていたことから、日本武道館での稽古には気負いする面があったようだ。渋谷(楊)の証言に拠れば、それまで続けていたタバコを

やめたという。しかし、他の日本武道の講師や実践家の一部には評判は芳しくなかったようで、建設されたばかりの武道の殿堂日本武道館で中国の武術を稽古することへの批判もあったという¹¹⁾。

当初、稽古は職員に限られており、日本武道館の機関誌「武道」に収められた写真にも仕事帰りのシャツとスラックス姿のサラリーマン風の練習生が複数写り、さらには楊自身、授業終わりか、同じくシャツとスラックスのサラリーマン風の姿で太極拳の実技を教えている(楊、1968、64-65)。この記事は1968年3月のものである。日本空手協会の稽古初めでの太極拳披露が1月であるから、2ヶ月程度で楊は日本武道館で教室を開いたことになる。

さらにこの記事執筆においては善隣書院の学生であった渋谷(楊)が手伝っていると証言している¹²⁾。彼女の記憶では、この教室は数ヶ月、職員向けに行い、後に一般公開をしたという。楊は一般公開に際して、中国語教室の学生を勧誘した。その際、渋谷(楊)麻紗のみが参加し、楊の手伝いをするようになったという¹³⁾。実際に1968年5月の新聞記事¹⁴⁾では日本武道館の太極拳稽古が紹介され、連絡先が「太極拳研究会」となっている。1968年上旬に始まった職員向けの学習会は5月頃には一般公開されていたのである。

当時、三浦には日本武道館事務員で、後に全日本太極拳協会の指導委員長を歴任する中野春美が同行しており、稽古のたびに楊は渋谷(楊)と、三浦・中野の四人で食事に行ったという。渋谷(楊)の回想では「豪華な食事」であったというから、一種の接待であったようである¹⁵⁾。このように楊と三浦の密接な関係性が築かれていた。

この教室で楊は本格的に太極拳を教えることになる。このとき、彼は自身の幼少期の体験をもとに稽古を筋立てることにしたようである。

すなわち、立禅による瞑想から始まり、気功法のスワイショウ、同じく気功法の八段錦前半、楊がアレンジした簡化太極拳の套路、中休みがあり、その後、24 式の型からの部分稽古、八段錦後半、立禅、スワイショウという流れである。渋谷(楊)によると、稽古は楊の套路を学習者が見取り、模倣する見取り稽古であったという¹⁶⁾。

八段錦は彼が学校の国術部で学んだ馬先生の指導法を引用したものであると語っていたようである¹⁷⁾。この頃には現在の空手着を来た、見取り稽古による立禅、スワイショウ、八段錦という健康太極拳のパッケージが完成していた。このように考えると健康太極拳(のパッケージ)の誕生は 1968 年とすることもできる。

以上の確定された年代は当事者たちの認識とは実は異なっている。楊は日本武道館で指導するきっかけとなった「鏡開きの稽古」を 1967 年 1 月 11 日としており(楊、2001、155)、日本健康太極拳協会の資料でもこれに続く日本武道館での稽古も 1 年間、誤って記載されている。また、楊と同行した渋谷(楊)は、楊が中国語の教室で学生たちに日本武道館での稽古に来ないかと誘ったのを「1966 年」の「春」としている¹⁸⁾。しかしながら、日刊スポーツの記事や日本武道館の機関誌などから、日本武道館での稽古初めは 1968 年だと考えられるのである。

3. 日本太極拳協会との決別

楊の太極拳教室は 1968 年から一般公開された。その間、三浦は都内で行われていた<日本太極拳協会>という学習会を知る。彼は「立ち消え」状態だったその会の会長古井に声をかけ、1969 年 8 月に両団体を統合、日本太極拳協会を発足させる。このとき、古井系の技術代表として獨協大学の教員である大瀧一雄が、三浦系の技術代表として大東文化大学の教員である楊が、それぞれ「師範」に就任することになった(三浦、1980、2-3)。

楊はこの日本太極拳協会での稽古をあくまでも日本武道館での稽古として、組織の内実やそこでどのような出来事があったのか、多くを語っていない(楊、2001 など)。そのため、楊の語りやそれをもとにした日本健康太極拳協会の資料では日本武道館＝日本太極拳協会での様子や顛末が不明瞭であった¹⁹⁾。また、日本太極拳協会自体が解散し、当時の資料の殆どが散逸しており、さらには関係者の多くが鬼籍に入っているため、日本太極拳協会側からの取材が難しい状況である。

今回は日本太極拳協会解散後、三浦がその顛末を簡潔に記した資料を入手した。この資料と当時を知る楊の弟子たちの証言とを合わせて、日本太極拳協会での楊の様子を検討したい。

日本太極拳協会発足後から、空手着で太極拳を行う楊の姿が資料から確認できるようになる(楊、1973、186)。1968 年 3 月頃の職員対象の稽古においては空手着を来ていないことから、この空手着は日本を冠した協会の師範となった楊の自負であるとも考えられる。のちに、この空手着姿の太極拳は健康太極拳のトレードマークとなる。日本武道館の教室を拠点としつつ、楊は空手道場など、都内の各会場での稽古を増やしていった²⁰⁾。日本武道館での活動が太極拳指導者・楊名時を生み出すとともにそのキャリアを飛躍的に発展させたのである。その背景には日本武道館建設の立役者の一人であった三浦(日本武道館、2015 参照)の後ろ盾があったのだが、両者の関係はしかし、日中国交正常化を機に崩壊していくことになる。

1974 年 6 月に古井の団体で学んでいた政治家、後藤隆之助が団長となり、日本太極拳協会の訪中団が組まれる(三浦、1980)。その後、後藤団長らによる報告会が行なわれるが、この会を契機に楊は苦境に立たされることになる。楊の著作の出版をきっかけに、1971 年から日本武道館の稽古場に通り始めた編集者で、のちに日本健康

太極拳協会で幹部となる中野完二は報告会について次のように証言している。

日本太極拳協会という名前で中国に勉強に行く団を 2 回くらいやったんですね。最初のときだったか終わってだったか……後藤隆之助という先生がそのときの団について行かれて、帰ってきてから朝日新聞の数寄屋橋の朝日講堂で報告会(注: を行った)。そのとき、「今までの太極拳はなんだったんだ」という批判(注: がされた)。僕は楊名時先生と隣りあわせてそれ聞いてて、それ以来「もう自分が受け入れられてないかな」ということ(注: を感じられて、それ)で(注: 楊は)行かなくなってしまった。²¹⁾

数寄屋橋にあった朝日新聞の会館で報告会が行われた。楊ら日本太極拳協会の師範を訪中団は非難した。このことを三浦は「技術指導問題」とし、活発な議論の後、「指導の基本原則は一切の日本的自己流技術を排し、中国武術協会の制定する(もの)……を学習するなどを決定」(三浦、1980、3)としているが実際は感情的な問題をはらむものであったようである。「自分が受け入れられない」という印象を受けたのではないかと中野は楊の心中を慮っている。

中野はこの報告会をきっかけに楊の日本武道館での稽古が終わったとしているが、渋谷(楊)はこの報告会の記憶がなく、その後、稽古場で起きたある出来事がきっかけではないかと述べている。渋谷(楊)の証言を次のように整理した。

その出来事は稽古の中休みに起きたという。「『ちょっと先生お時間ください』って言って、訪中団に参加したある弟子が出てきた。そして、「私たちが学ぶべきものは、中国の本物の太極拳です。楊先生の太極拳は本物じゃありません」と言ったという。渋谷(楊)によれば、「自分が中国行って習ってきたっていうような、そういう

話はしてない」という。渋谷(楊)は「この人はなに言ってるんだろう?」と思ったという。そのときに楊は「じゃあ、もう私は私の太極拳しかできませんので、私はここを去ります」と言った。すると弟子たちも状況に気づき「何人か涙流して」いたという。楊は「和して同ぜずね、(注: 訪中団に参加して中国式の太極拳をした人たちはその人たち)のやり方、私は私の(注: やり方)で。和して同ぜずでいきましょう」と言ったそう。『『けんかしないでお互いに違う道をそれぞれ歩みましょう』と言って、それでもそのとき、全部やったかな……最後まで。で、翌週からもう来なくなった』²²⁾。

両者が言う、楊の日本太極拳協会の去り際は異なっている。これはそれぞれがそれぞれの出来事にいなかったから生じている食い違いと考えられる。つまり、数寄屋橋での報告会には渋谷(楊)が、稽古場での出来事は中野がいなかったということであろう。そうすると、時系列的には報告会→稽古場と考えられる。報告会で一般論として従来の指導体制を非難され、稽古場に出てきていた楊を訪中団に参加した弟子が直接的に批判したということである。このように考えると、この批判を楊が受け入れるかたちで日本武道館を去ったと推測できる(時系列が逆なら、この批判を楊が理解できないと考えられる)。

さて、これが日本太極拳協会での稽古の実際であった。空手の好きな中国語教師から日本武道館に本部を置く団体の師範となり太極拳指導者として世間での注目が高まった中で自身の転機となった団体から自身の太極拳を否定される形で楊は日本武道館を去ったのである。こうして、1968 年から始まった日本武道館での太極拳稽古は 1974 年に幕を閉じた。その期間は 7 年近くと長期間に及んだ。これは楊にとって 40 代の後半にあたる。

日本武道館での稽古は日本太極拳協会という団体の稽古であり、そこでの稽古を通して楊の

太極拳指導のスタイルが確立していった。同時に楊は太極拳指導の場を日本武道館外に広げ、現在の日本健康太極拳協会の礎を作っていた。しかし、その独自のスタイルが日中国交正常化以降、正統的なもの(中国政府の制定したもの)ではないと非難され、結果的に組織を追い出された。こうして、楊は太極拳指導者・楊名時の最初の後援者である三浦との決別へと至ったのである。

IV 健康と長寿の会と楊名時八段錦・太極拳友好会

1. 楊名時の太極拳の組織化

1974年、楊は日本武道館を去ったが、ちょうど、日本太極拳協会を脱退するのと前後して朝日カルチャーセンターで太極拳講座が開設された(楊、2001、171では「1974年5月」)。この朝日カルチャーセンターが彼の太極拳の新たな普及拠点となっていく。

渋谷(楊)の回想では、教室に通っていた人たちが誰も辞めず継続し、「師範」となっていく中で新しい人の参加を可能にするために別の時間帯での教室を増やしていったという²³⁾。こうして実践者が拡大する中で1975年1月には楊名時八段錦・太極拳友好会が発足し、楊の太極拳は組織化されていくことになった。

楊は当初、自身の太極拳を「楊家太極拳」と称しており、伝統太極拳の「楊式太極拳」を引き継ぐものとして自己紹介をしていた²⁴⁾。ただ、楊の太極拳と楊式太極拳を比較した際、彼独特の技の解釈や型の創作、動きとしても空手的な決めや貯めが目立ち、楊式太極拳を引き継ぐというのは適当ではないと思われる。また、「楊家太極拳の正統の使い手」となると楊露禪の系譜に位置する伝人という印象が強く、楊の経歴を考えると不適当であった。最終的には自身の太極拳を「楊名時太極拳」とすることで解決したものの、この「楊家太極拳」自称は1980年代ま

で続いてしまう(楊、1980)。そのため、楊を批判する人たちはこの点を強調することになる(後述の吉田による楊批判など)。

ただし、友好会の名称に「楊名時八段錦・太極拳」とあるように、日本武道館を去った直後から自身の太極拳に自分の名を冠してオリジナルなものであることを明示していたということも指摘しておきたい。楊名時オリジナルの太極拳であるのか、中国の伝統的な太極拳であるのかは1980年代になるまで曖昧にされた部分もあったのである。楊が自己の権威付けのために敢えてこのようなことを行ったのか、あるいは日本での生活が長く中国武術の世界での常識が身についていなかっただけなのか、不明瞭である。

この点は資料もなく、確固たる証言もないため、判断はつきにくい、自身の太極拳をどのように呼ぶかという重要な事項について判断を曖昧にするなど、楊にはおおらかな、あるいは優柔不断な側面があったことは確かであろう。この性格が時として後援者との決別を生み出すことがあった。その代表的な例が、楊が日本武道館を去った後に彼の後援者となった吉田誠三との決別であった。

2. 吉田誠三と健康と長寿の会

健康と長寿の会は、名古屋の開業医である吉田誠三(1916-1983)が様々な養生法の普及のために発刊した『健康と長寿』誌の読者の会のことである。『健康と長寿』が発刊されたのが1969年であり、1972年には第1回の全国大会を行った。吉田は元来、当時の医師会会長武見太郎の抵抗勢力として活躍するほどの政治力のある医師であり、将来的には政界への進出も期待されていた。しかし、心筋梗塞により倒れ、以後、健康と長寿のための啓蒙活動へと尽力していく(蒲生、2016)。

楊は1972年の第1回大会の名古屋大会や翌年

の東京大会にも参加し、太極拳を披露している(日本健康太極拳協会、2010、255)。健康と長寿の会会長(名誉職と思われる)は古井であり、彼との関係で楊が呼ばれたのではないかと思われる。このように1972年頃、日本太極拳協会から楊が去る前に楊と吉田は出会った。楊は日本太極拳協会から退去するが吉田側の関係者によると、この点を吉田自身は後年になるまで知らなかったようだ²⁵⁾。日本武道館での騒動を知らないままに吉田は楊の普及活動をサポートしていく。

楊名時八段錦・太極拳友好会発足から2年後の1977年、吉田は自身が実質的なオーナーである『健康と長寿』誌の紙面を提供し、楊名時八段錦・太極拳友好会の機関誌「太極」が発刊された(日本健康太極拳協会、2010、218)。『健康と長寿』誌は一部の紙面が機関誌「太極」のものであったのである。1977年には共著で『まさつと呼吸健康法』という書籍を出版している(楊・吉田、1977)。このように両者は蜜月関係と呼べるものであり、『健康と長寿』誌に吉田が私財を投じることは楊の活動をサポートすることにもつながっていたのである。

3. 吉田誠三との決別

しかしながら、楊と吉田の関係は唐突に悪化し、両者は決別することになる。

日本健康太極拳の50年史では1981年に『健康と長寿』で楊を批判する記事が掲載され、それに続いて週刊誌での楊バッシングが行われたと書かれているものの、なぜ、両者が不仲になったのか、その顛末について詳しい経緯は書かれていない(日本健康太極拳協会、2010、179)。今回、『健康と長寿』の当該バックナンバーを入手、新たに得られた吉田・楊双方の関係者の証言もあわせ、当時の経緯をまとめた。

吉田側の関係者証言及び資料をもとに整理すると、次のような経緯で楊と吉田が仲違いしたようである。

1980年3月の日本交通公社主催、楊名時八段錦・太極拳友好会共催の訪中団へ吉田が参加した。このとき、吉田は楊の独特な太極拳に対する中国人たちの反応に違和感ないしは不信感を覚えた²⁶⁾。この出来事が背景となり、吉田は翌年1981年3月に名古屋にある楊の組織・奥伝会の新人事案を楊に提出、一時は楊もそれを受け入れた。ところが翌日、楊はその人事を翻した。それに対して吉田が激怒する(健康と長寿の会、1981、5-6)。渋谷(楊)は当時を振り返りながら、おおらかな楊が吉田の押しの強さに一度は賛意したもの、翌日、新人事案で更迭させられる当人を前に情が入って辞めろとはいえなかったのではないかと推測する²⁷⁾。

本稿では楊の太極拳を日本独自の太極拳として評価しているが、当時の人々がこのような視点で彼の太極拳を見つめていたかは分からない。少なくとも中国の太極拳(伝統拳・制定拳)と楊の太極拳が異なる側面が多いということは吉田においては否定的な印象を与えた可能性が強い。また、吉田の後援者としての自負は時として、楊の組織への過度な干渉となった点も否めない。太極拳をめぐる認識、そして、組織に対する立ち位置など、両者の考えが微妙に食い違っていたということは考えられる。

その後、6月の『健康と長寿』誌に楊の太極拳への批判記事が掲載され(日本健康太極拳協会、2010、179)、それにより楊名時八段錦・太極拳友好会は健康と長寿の会と「別行動」というかたちで脱退に至った(同、192)。続いて7月に『健康と長寿』誌は臨時号として楊の太極拳が持つ独自性や組織運営の方針など、一冊丸々楊を批判する内容のものが刊行され、吉田は強い筆致で楊を非難した(健康と長寿の会、1981)。

激怒した吉田を鎮めるため、楊は渋谷(楊)と謝罪の手紙を書いたが、渋谷(楊)の証言に拠れば結局は送付しなかったという²⁸⁾。しかし、実際は吉田の手元には楊からの手紙が届いている。手

紙冒頭を引用する。

雑誌の件 ものいえばくちびるさむし。 / ……第1回健康と長寿の会、以来、吉田先生にはお世話になっている。 / 人様の健康と長寿を願っている。 / 友の会(友好会)の機関紙として健康と長寿誌を定めた。今回、私をひぼうする記事がでたのは残念である。皆もショックだろうと思う。 / 和して同ぜずでゆきたい。 / 考違いのもとになった、健康と長寿をやめて、太極という雑誌を機関紙とする。長いあいだお世話になりましたが、今回をもって健康と長寿の会からぬける。 / 今後は、名古屋の人達が中心となってやってほしい。 / なぜ、吉田誠三先生がこれほどいかっていられるのかわからない(健康と長寿の会、1981、11)。

日本語文章としてたどたどしさがある点を考えれば渋谷(楊)と書いた手紙ではない可能性が高く、渋谷(楊)と手紙を書いた後、改めて楊自身で自身の気持ちをしたためたものを吉田に送ったと考えられる。文面からは楊の心理的混乱が伺える。上記引用以外の手紙文面では「先生を今後とも友としたい」としつつも「吉田さんが私を育てたというのはまちがいだ」、「人に恩きせがましくゆうマアことはまちがいだ」、「私は吉田先生を人としてえらびそこなった」と矛盾した感情を吐露している(健康と長寿の会、1981、12)。

この手紙とともに、楊側の人間と吉田側で押し問答になったこともあり、余計に吉田を感情的にさせる結果となった。この騒動の渦中、東京の雑誌記者が吉田側に接触し²⁹⁾、同年11月に『週刊文春』で『健康と長寿』と同種の楊へのバッシング記事が掲載されるに至った(日本健康太極拳協会、2010、179)。

日本太極拳協会を去った楊をサポートしたの

が吉田であった。しかし、吉田との間に亀裂が走り、両者は決別してしまう³⁰⁾。健康と長寿の会との関係は1972年に始まり、1977年の機関誌の紙面提供から本格化し、1981年6月をもって終わった。楊にとっては50歳から57歳までの出来事であった。

結果的にこの事件以後、楊名時八段錦・太極拳友好会と健康と長寿の会は「別行動」をすることになり、楊名時八段錦・太極拳友好会は独自の機関誌「太極」を発行し、独り立ちすることになったのである。こうして、独自の組織・独自のメディアを持つ楊名時の太極拳団体が完成することになった。

V 結論

これまで、楊名時という中国語教師が太極拳の指導者として世に出て自身の組織を持つまでの経緯を追ってきた。ここまでの内容を整理したい(表1参照)。

1960年代、楊は家族を養うため、中国語教師として働いていた。空手などの武術に興味を持っていた楊は幼少期に学んだ太極拳を自身の養生のために1人、実践していた。中国語の授業の中で太極拳や気功という養生法を見せて周りを和ませ、授業後に文化学習のようなかたちで学生たちとともに太極拳を実践していた。楊、そして、日本健康太極拳協会は、楊の太極拳の端緒を1960年のアジア・アフリカ語学院としているが、本稿ではもう少し厳密に、かつ幅広く1963年頃のアジア・アフリカ語学院など、彼が勤めた中国語の教室として理解したい。中国武術の素養を持つ、空手好きの中国語教師、それが当時の楊であった。

そんな楊は日本空手協会の鏡開きで太極拳を披露する。これが縁となり日本武道館で太極拳を指導することになる。武術を教えること、まして、長らく本国との競技者とも交流していない中、

表 1 楊名時の太極拳普及初期の活動

年月日	年齢	出来事
1957年12月	33	東京中華学校退職 1958年-1966年の8年間、中国語の非常勤講師として各校で勤務
1963年4月	39	アジア・アフリカ語学院非常勤講師着任 この頃、授業の延長で太極拳を学生と練習
1964年頃	40	渋谷麻紗、善隣書院での楊の「何か」を目撃 この頃、中国語の教室で太極拳や気功を披露か
1966年4月	42	大東文化大学講師着任
1968年1月	44	後樂園卓球センターでの日本空手協会鏡開きに参加し太極拳披露
1968年3月	44	日本武道館に楊名時の太極拳記事。このころには職員向け教室が開始
1968年5月	44	新聞記事に楊名時の教室。このときには「太極拳研究会」となっており、一般公開が始まっていたことが伺える。
1969年8月	45	日本太極拳協会発足。「師範」に
1972年	48	「健康と長寿の会」第1回大会
1974年5月	50	朝日カルチャーセンターでの教室開始
1974年6月	50	日本太極拳協会からの訪中団。その後、楊名時、同協会を脱退
1975年1月	51	「楊名時八段錦・太極拳友好会」発足
1980年	56	「楊名時八段錦・太極拳友好会」中国の旅
1981年6月	57	吉田誠三との間で諍い。「楊名時八段錦・太極拳友好会」は「健康と長寿の会」と「別行動」となり、機関誌「太極」を刊行

自流で形作っていた太極拳をどう教えるか。楊は幼少期の学習体験をもとに、現在の健康太極拳のパッケージを形作っていった。健康太極拳の中核を楊名時独自の簡化太極拳及びその稽古システムと考えるなら、それらが確立され、なおかつ彼自身が太極拳指導者として人前に登場した 1968 年の日本武道館を健康太極拳の誕生の瞬間であったと理解することができる。

期せずして日本武道館に本拠地を置く団体の技術トップとなった彼は稽古場を切り盛りしながら、教室を増やしていった。しかし、日中国交正常化に伴い、中国からの情報が流入し、中国政府とのパイプが重視される中で楊の独自性の強い太極拳は否定され、日本武道館から退却させられることになった。

日本武道館を去った楊はカルチャーセンターを拠点としながら実践者を増やしていき、周囲の人々ともに楊名時八段錦・太極拳友好会を立ち上げた。後援者の一人吉田によって、『健康と

長寿』誌の紙面が提供され、機関誌「太極」が発刊され、組織化は進んだ。しかし、組織人事をめぐる対立などにより、楊と吉田は決裂し、『健康と長寿』誌から「太極」は独立することになる。

こうして自律した組織と機関誌を持ったとき、楊は太極拳指導者として完全に独立することになったのである。この年が 1981 年であるから、中国語教師・楊名時が太極拳指導者・楊名時、あるいは協会の表現を借りれば「楊名時太極拳師家 楊名時」として完全に独立するまでには 20 年近い歳月を要したということが伺える。1960 年代の中国語の教室で披露した太極拳(30 代から 40 代半ば)、1970 年代前半の日本太極拳協会師範 楊名時の太極拳(40 代後半)、1970 年代後半の健康と長寿の会にサポートされた楊名時の太極拳(50 代)、そして、1981 年以降の独立し自律した楊名時太極拳＝健康太極拳(60 代から 80 代まで)という時系列がここに見えてくる

のである。

興味深いことに、日本武道館を去ったことも吉田と袂を分かったことも、結果的に「楊名時太極拳師家 楊名時」の形成に資するものがあったということである。この 2 つの別離はそれぞれで楊が発した「和して同ぜず」のフレーズが示すように、楊名時という人物を中心として形成された独自の太極拳世界が他の団体、太極拳に「同ぜず」に自律していくためのプロセスであったと考えられるのである。

本稿では従前、「1960 年」とされた健康太極拳の端緒を資料等の精査から 1963 年頃であったこと、また、楊自身が 1967 年と勘違いしていた日本武道館での稽古始めを 1968 年であったことを明らかにした。さらに現在では存在しない日本太極拳協会や健康と長寿の会での活動や関係などを資料と当時を知る人々の証言から明らかにした。本稿の検討により、楊名時が独自の太極拳を確立していくプロセスが提示された。これにより、日本養生史における、日本独自の健康太極拳の誕生と発展経緯が明らかにされた。さらに戦後昭和史において活躍した様々な団体や人物が楊と関わっていたことが見えてきた。そこに垣間見える太極拳や気功を中心とした運動法の発展に貢献した人々の交流と連携は 1960 年代から 1980 年代にかけての昭和養生史を検討する取り掛かりとして重要であると考えられる。昭和養生史を紐解き、その中に改めて楊らの貢献を検討するためにも、これらの人々の交流と連携の全容は今後の課題としたい。

注釈

1) 楊の太極拳と一般的な太極拳とを比較すると多くの違いが見受けられる。分かりやすいものでも服装（楊：空手着、一般：カンフースーツなどの中国服）、種目（楊：独自の簡化 24 式太極拳のみ、一般：多くの套路。刀や剣を用いるもの）などがある。太極拳思想の観

点からは競技性の否定が挙げられる。一般的な太極拳ではスポーツ化が進み、競技としての太極拳が求められる中で、楊は太極拳の競技性を否定しており、競技大会などは彼の組織では実施していない。この競技性の否定の代わりに強調したのが太極拳の養生面である。楊は太極拳を競技ではなく健康ための養生法として理解し、それを基本として自身の太極拳思想を形作っていった（蒲生、2017）。これらの特徴はその後、日本健康太極拳協会等に受け継がれるが、楊独特の身体技法（身体の用い方）の継承はまちまちである。楊の動きは太極拳の特徴であるゆったりとした連続性のある動きとは違い、空手的な強弱のついたものになっており、太極拳としてはかなり独特なものである。これらの点については今後、改めて映像資料を用いた質的検討や実践者のインタビューなどを用いて、健康太極拳の楊名時以後の発展として検討していきたい。

2) 日本健康太極拳協会では自身の太極拳を「楊名時八段錦・太極拳」と呼んでいるものの、協会関係の出版物では「健康太極拳」と称しているものが多い（楊、2007 など）。本稿では中国政府が編纂し、普及の中心となっている武術太極拳に対して健康太極拳を位置づけるため、この呼称を用いている。ちなみにここでの八段錦の読み方は「ハチダンニシキ」であり、気功実践で一般的に用いられる「ハチダンキン」という読み方とは異なる点に注意したい。 参照：日本健康太極拳 HP「楊名時八段錦・太極拳について」

<https://www.taijiquan.or.jp/youmeiji>

確認：2016 年 1 月 5 日

3) 帯津良一「場」の養生塾 HP

<http://www.karadahouse.com/obitu/facilities.html> 確認：2017 年 1 月 29 日

4) 楊はこの学校を「東亜高等学校」と呼び、「旧制高等学校」としていたが（楊、2001、71-75）、

この学校はいわゆるナンバーズスクールとしての旧制高等学校ではない。東亜学校はもともと、中国からの留学生の予備教育を行う私立の語学学校であったが、のちに「高等学校令」に準拠した高等科が新設され、実質的には高校の役割を果たした(韓、2012)。東亜学校で楊を教えていた生物学者の湯浅明は「旧制高等学校の生物学の教師として、氏に生物学を教えました」としている(湯浅、1973、3)。このように、当事者である教師や学生がこの特殊な学校を旧制高校として捉えていたことが伺える。

- 5)学校側の記録では楊が同校校長を務めたのは1953年10月から1956年12月となっている。東京中華学校「歴代の校長」

<http://tcs.or.jp/about/principals/>

閲覧：2017年1月15日

- 6)戦争で「学業が満足にできない心のいらだちや、食べ物の貧しさなどの苦悩に遭遇してみて初めて、幼いときから身につけてきた太極拳の存在が大きく見えてきました。呼吸を整え、心を静めてゆったりとした動きに身を任せていると、無我の境地が訪れます。そしてそのあとには、さわやかに本来の自分が甦ります。私は日本人の誰もが辛かったこの時代、太極拳によってどんなにか救われたことでしょう」(楊、2001、140)。

- 7)この写真は日本太極拳協会の資料などによく引用されている。その際は、「アジア・アフリカ語学院の1960年代の合宿風景として紹介される(日本健康太極拳協会、2010、203)。「合宿」というが太極拳の合宿ではなく、中心は語学研修である。

- 8)楊麻紗(1943-)。楊の初期からの弟子であり、楊が先妻と死別後、再婚。楊の死後は楊家養心太極拳を主宰(楊家養心太極拳 HP

<http://www.taikyokuken.jp/index.html>

閲覧：2017年1月15日)。生年については、

渋谷、2011 参照。太極拳の指導者としては「渋谷麻紗」名義の時代が長く、現在でも俳名には「渋谷」を用いている。本稿では、「楊」との混同を避けるため、当時の姓を用いて「渋谷(楊)」と表記している。渋谷(楊)は、楊が非常勤の中国語教師として活動していた時期から、長らく彼の秘書的役割を担っていた。本稿では渋谷(楊)の聴き取り調査が中心となっており、史料としてやや偏りを感じられるかもしれないが、楊の初期の活動を理解するためには彼女の証言が唯一の資料である場合が多く(当時を証言できる人物が彼女しかいない場合があり)、ご理解いただきたい。

- 9)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。場所は東京都千代田区学士会館近くのファミリーレストラン。音声データ118分に収録。

- 10)日刊スポーツ 1968年1月8日11面 掲載

- 11)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 12)2017年5月12日 楊麻紗氏 電話での聴き取り調査。2015年8月頃に当該資料を送付した際、資料に関する情報を得た。聴き取り調査では音声録音からトランスクリプトを作成するが今回は情報を書き留めるだけだった。その際、通話した日時を控えることを失念しており、改めて2017年5月12日に聴き取った内容について確認した。

- 13)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 14)1968年5月20日 毎日新聞朝刊

- 15)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 16)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 17)「故楊名時先生のエピソード(13) 八段錦の膝の屈伸」 楊家養心太極拳 HP

<http://www.taikyokuken.jp/topics.html>

閲覧：2017年1月15日

- 18)「故楊名時先生のエピソード(1) 出会い」 楊家養心太極拳 HP

<http://www.taikyokuken.jp/topics.html>

閲覧：2017年1月15日

- 19)『楊名時太極拳 40 年史』(日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会、2000)では日本太極拳協会の資料(役員簿)が掲載されているものの(p.47)、説明が抜けており、それがどのような組織の資料かは分からないようになっている。
- 20)当時の書籍では 1973 年発行の書籍では日本武道館教室が木曜と金曜、平和相互銀行での稽古が土曜、虎ノ門の会場では水曜と木曜、抱一龕空手道場では火曜と金曜となっている(楊、1973、186)。
- 21)2015 年 4 月 20 日 中野完二氏 聴き取り調査。場所は東京都千代田区学士会館内バー→日本食レストラン。食事をしながらのインタビュー。音声データ 66 分に収録。
- 22)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。同じ話は楊家養心太極拳サイトにも記載されている。「故楊名時先生のエピソード(8) 和して同ぜず」楊家養心太極拳 HP
<http://www.taikyokuken.jp/topics.html>
閲覧 : 2017 年 1 月 15 日
- 23)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。
- 24)楊、1971 のまえがきでは「私の家は代々太極拳を伝える武門」とし本文では「楊家太極拳」を紹介し(132-136)、「著者紹介」では「楊家太極拳の正統の使い手」となっている。
- 25)2014 年 6 月 19 日 二宮恒夫氏 聴き取り調査。二宮氏は吉田誠三の病院に勤めている事務方で当時より吉田の秘書的役割を担っていた。場所は愛知県名古屋市の吉田病院の 1 室。音声データ 130 分に収録。
- 26)2014 年 6 月 19 日 二宮恒夫氏 聴き取り調査。
- 27)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。
- 28)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。
- 29)2014 年 6 月 19 日 二宮恒夫氏 聴き取り調査。
- 30)その後、吉田は 1983 年に亡くなり(健康と長寿の会、1084)、『健康と長寿』は吉田誠三の息子で病院を継いだ洋が発刊を続けていたが

(蒲生、2016)、2000 年、廃刊を迎えた(健康と長寿の会、2000)。

引用文献

- 中華人民共和国体育運動委員会(日本太極拳協会訳)(1977) 太極拳運動. 不昧堂出版、東京
- 中国・国家体育総局健身気功管理センター[編]、楊名時・帶津良一[日本語監修](2004) 健身気功新功法シリーズ(『六字訣』林茂美訳・『八段錦』橋逸郎訳・『五禽戲』津村喬訳・『易筋経』楊進訳). ベースボール・マガジン社、東京
- 蒲生諒太(2016) 吉田誠三の予防医学思想と「健康と長寿の会」. 統合人間学研究 (1) : 105-118.
- 蒲生諒太(2017) 「和」の太極拳——楊名時の太極拳思想について. トランスパーソナル心理学／精神医学 16(1) : 145-160.
- 韓立冬(2012) 東亜学校の中国人留学生予備教育——特設予科との関係を中心に. 年報地域文化研究 (16) : 45-73.
- 笠尾恭二(2000) 中国拳法伝——新たなる拳法史観のために. 福昌堂、東京
- 笠尾恭二(1994) 中国武術史大観. 福昌堂、東京
- 健康と長寿の会(1981) 健康と長寿. 昭和 56 年特別臨時号(1981.10)
- 健康と長寿の会(1984) 健康と長寿. 昭和 59 年 2 月号
- 健康と長寿の会(2000) 健康と長寿. 平成 12 年 12 月号
- 菊地俊介(2004) 認識・イメージ——日本占領下華北における在留邦人の対中国認識. OUFU ブックレット (3):271-293.
- 黄耐之(永富博道訳)(1986) 古伝太極拳. ベースボール・マガジン社、東京
- 李自力(2009) 日中太極拳交流史. 叢文社、東京
- 李天驥(李徳芳訳編)(1994) 簡化 24 式太極拳.

ベースボール・マガジン社、東京
毛沢東（山村治郎訳）（1964） 体育の研究. ベースボール・マガジン社、東京
松田英子(1987) 太極拳と私. 日本中国友好協会太極拳委員会 太極拳の歩み——太極拳普及 10 周年記念誌 : 13-18.
松田隆智(2001) 図説 中国武術史. 壮神社、埼玉
三浦英夫(1979a) 美と心と健康の太極拳. ひかりのくに、大阪
三浦英夫(1979b) 太極拳健康法. 立風書房、東京
三浦英夫(1980) 日本太極拳 15 年のあゆみ 全日本太極拳協会. 太極 1980 薫風号(日本太極拳学習 15 周年記念) : 2-4.
永富博道(1995) 白狼の爪跡——山西残留秘史. 新風書房、大阪
永富博道(1986) 訳者の言葉. 黄耐之(永富博道訳) 古伝太極拳. ベースボール・マガジン社、東京 : 5-8.
奈良雅之・小林紀明・刀根洋子・堤千鶴子・安齋ひとみ・吉田由美・糸井志津乃・風間眞理・鈴木祐子・川田智恵子・原彰男・五十嵐美和・渡邊明美・阿部八千代(2013) がん療養者に対する太極拳の効果に関する最近の研究動向. 目白大学健康科学研究(6) : 1-6.
日本武道館(2015) 公益財団法人 日本武道館 50 年史
日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会(2000) 楊名時太極拳 40 年史
日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会(2010) 楊名時太極拳 50 年史
大平雅子・戸田雅裕・田麗・森本兼曩(2010) 太極拳が精神的・身体的健康度に及ぼす効果. 日本衛生学雑誌(65) : 500-505.
大滝ママー雄(1972) 太極拳入門. 地歴社、東京
帯津良一[監修](1993) ホリスティック医学の治癒力. 法研、東京

帯津良一・チャン、アグネス(2016) がんに負けない太極拳養生法. 旬報社、東京
王英儒(編訳)(1976) 楊式太極拳体用法. 昭和出版、大阪
笹原千穂・松原三智子(2016) 太極拳が中高齢者の健康に及ぼす効果についての文献検討. 北海道科学大学研究紀要 第 42 号 : 25-31.
孫皎・佐々木順子・大木秀一(2011) 太極拳の実施が認知機能に与える効果に関する文献レビュー. 石川看護雑誌 Vol.8 : 103-108.
渋谷麻紗(2011) 渋谷麻紗句集 寒晴. 角川書店、東京
田中剛(2003) 日本敗戦前後の中国人留日学生政策. 森時彦編 長江流域社会の歴史景観——京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告. 京都大学人文科学研究所 : 235-263.
津村喬(1990) 気功への道. 創元社、大阪
津村喬(2011) 健身気功入門——ころとからだを養生する. 春秋社、東京
津村喬(2014) ヘルシンキでの津村気功活動——50 周年記念講習での記念講義. 気功文化 2014 年 8 月 20 日号 NPO 法人気功文化研究所 : 1-12.
津村喬[編]・帯津良一[監修](2004) 実践 伝統四大功法のすべて. 学研パブリッシング、東京
楊名時(1968) 中国古来の「太極拳」. 機関誌「武道」 59 号(1968 年 3 月 1 日) : 63-65.
楊名時(1971) 太極拳——中国八億人民の健康体操. 文化出版局、東京
楊名時(1973) 中国式健康術—3 分でできる太極拳入門 八段錦. 主婦と生活社、東京
楊名時(1980) 太極拳の心. 海竜社、東京
楊名時(1995) 「夢即是無、無即是夢」の人生. 外国語学会誌 (25) : 1-4
楊名時(2001) 太極——この道を行く. 海竜社、東京
楊名時[著]/中野完二[編](2004) <太極> 巻頭

文集. 日本健康太極拳協会
楊名時[監修]/楊進・橋逸郎[著](2000) 健康太極拳規範教程. ベースボール・マガジン社、東京
楊名時・吉田誠三(1977) まさつと呼吸健康法. 文化出版局、東京
楊名時・渋谷麻紗(2004) ドクター帯津良一がすすめる 50 歳からの楊名時健康太極拳. 海竜社、東京
楊慧・楊玲奈(2007) DVD ブック だれでもできる楊名時太極拳. 山と溪谷社、東京
楊慧(2007) DVD で覚える健康太極拳 楊名時 24 式. 新星出版社、東京
楊進・橋逸郎[著](2011) 新版 健康太極拳規範教程. ベースボール・マガジン社、東京
湯浅明(1973) まえがき. 楊名時 中国式健康術——太極拳入門：八段錦. 主婦と生活社、東京：3-5.
財団法人 アジア・アフリカ文化財団創立 50 周年記念誌編纂委員会(2008) 革新と創造——アジア・アフリカ文化財団創立 50 周年記念誌 [本文中での表記：50 周年記念誌]

謝辞

本稿のもとになる研究に際し、聴き取り調査へのご協力及び資料のご提供を頂きました楊麻紗先生（楊家養心太極拳）、中野完二先生（日本健康太極拳協会）、二宮恒夫先生（吉田外科病院）には深謝の意を表します。

また、資料のご提供を頂きました楊慧先生、楊玲奈先生、新井隆一郎先生、村上巖先生（以上、日本健康太極拳協会）、石原恒治先生（カルチャースペース元氣！）、丸山至先生（日本中国友好協会）、アジア・アフリカ語学院（とくに図書館司書の佐藤万矢子さま）の皆様にも心より感謝申し上げます。

最後に、日本での太極拳・気功普及の生き字引として研究に関するご助言を頂きました松村

健市先生、学会発表を通じて適切なコメントを頂きました日本養生学会の皆様、査読者の先生方、朝日カルチャーセンター中之島教室にて健康太極拳をご指導頂いております鳴尾知子先生、玉森幸一先生、村上先生に感謝の意を表します。

2017 年 3 月 6 日受付

2017 年 6 月 4 日受理